

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520585

研究課題名(和文)新しい日英語比較対照研究 認知語用論の視点から

研究課題名(英文)An Innovative Approach to Comparative Studies of Japanese and English: From the Perspective of Cognitive Pragmatics

研究代表者

内田 聖二(UCHIDA, Seiji)

奈良大学・教養部・教授

研究者番号：00108416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：英語と日本語の言語現象の違いをメタ表象という新しい視点で考察した。その根本的な仕組みの差は関連性理論の基本概念のひとつである表意を用いて説明できることを確認し、さらに、それはメタ表象という認知語用論的概念がかかわることを明らかにした。

この結論の妥当性を検証するために、語順が同じである韓国語との比較に発展させた。研究協力者、韓国Inha大学のNoh教授の賛同を得、メタ表象現象をキーワードとして共同研究に至り、日本語と同様の現象があることを確認した。その成果は同教授を招いてのワークショップで発表している。なお、以上の具体的な成果は別掲の2点の論文、5件の口頭発表、3冊の書籍に見ることができる。

研究成果の概要(英文)：The main objective of this research is to look at some kinds of linguistic differences of Japanese and English from an innovative perspective of metarepresentation. It has turned out that the basic mechanism can be explained in terms of 'explicature,' a fundamental theoretical notion of the theory of relevance, which is closely related to metarepresentation.

In order to confirm the conclusion above I proposed to Professor Noh, Inha University, Korea, a joint research to compare Japanese with Korean which has the same word order as Japanese. We read a paper at a workshop and we discussed that Korean has the same kind of linguistic phenomena as that of Japanese.

The results of the research can be found in two papers, five presentations, and three books listed below.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：日英語比較 認知語用論 関連性理論 メタ表象 国際情報交流(韓国) 国際情報交流(米国)

1. 研究開始当初の背景

ダイクシスをメタ表象という観点から遂行された、平成17年度から19年度にかけての「メタ表示能力と言語獲得に関する認知語用論的研究」(研究代表者:内田聖二)において明らかになった主なポイントは次の2点であった。

(1)ダイクシス現象とメタ表示能力は密接な関係がある。

(2)言語現象にメタ表示能力がかかわることは広く知られているが、願望を表す「たい/たがっている」や「くれる/もらう/あげる」などの授与動詞もその観点からとらえることができ、子どもの言語獲得と切り離すことができない。

本研究とのかかわりで具体的にいうと、(a)「たい/たがっている」は英語では want 一語で表現される、(b)「くれる/もらう/あげる」は英語では give を活用することで表現できる、ということが示唆されたが、統一的な説明までは至っていなかった。

また、「ダイクシスから引用へ:認知語用論からのアプローチ」(研究代表者:内田聖二)(基盤研究(C)20年度から22年度)で明らかになったのは以下の諸点である。

(1)ダイクシス現象とメタ表象能力を「引用」という観点からみることでより広い言語現象がメタ表象能力と関連することが明らかになった。

(2)日本語と英語の引用をメタ表象という視点でとらえると個別言語の特徴に留まらない一般化の可能性があることがわかった。

(3)引用にはいわゆる話法におけるダイクシスの交替現象や、直接話法、間接話法、自由間接話法(描出話法)といった古くて新しい問題が山積しているが、認知語用論としての関連性理論に足場を置くことで、メタ表象という切り口から統一的な説明が可能である。

このようなことから、(a)日本語、英語に直接話法/間接話法があるかどうかという表面的な分析ではとらえきれない、同じ認知原理に基づく引用の仕方が両言語にみられる、(b)話しことば、書きことばの区別を超えて引用について統一的な説明ができる、ということが判明した。

以上の研究成果を基盤として本研究に至った。

2. 研究の目的

従来、日本語と英語の比較対照研究は語彙、統語構造、意味構造、といったそれぞれの言語における個別的な言語的特徴を比較しその差異および類似点を分析していく手法をとるのが通例であった。しかしながら、その方式では言語事実の記述が中心となり、どうしてもその場限りの分析に留まることになる。本研究の特徴的な点は言語現象を認知語用論という視点から統一的にとらえ、日本語と英語を同じ土俵の上で考察するところに

ある。すなわち、人間の認知現象がそれぞれの言語にどのように反映しているのか、あるいは反映していないのか、そしてそれはどのようなメカニズムに則っているのかを解明しようとするものである。

本研究では、次のような言語事実を説明する言語規則を追究していくことを目標とした。

(1)たとえば、次の(ia,b)の文を日本語に訳出するとき、イタリックの部分にはそれぞれ、(iia,b)の下線部を付加しなければ自然な日本語とはならない。

(i)a. John has left, *in case you haven't heard.*

b. Why is Paul leaving, *since you know so much?*

(ii)a. 聞いてないといけないので言いますが、ジョンは出ていきました。

b. 君は何でも知っているので聞くのだけれど、どうしてポールは出ていったの。この言語事実は内田(2002)などで関連性理論という高次表意の具現の仕方の差であると指摘してきたが、そのより原理的な説明を目指す。

(2)内田(2007a, b)で明らかにしたように、「たい/たがっている」や「くれる/やる」には次のような人称のダイクシスにかかわる制約がある。

(iii)a. 私は花子と結婚したい/*したがっている。

b. 花子は太郎としたがっている/*したい。

(iv)a. 太郎は私にパソコンをくれた/*やった。

b. ?*太郎は私にパソコンをもらった。

ところが、これらの文法性は引用の形になると逆転する。

(v)a. 太郎は私が花子と結婚*したい/したがっていると言った。

b. 花子は太郎と*したがっている/したいと言った。

(vi)a. 太郎は私にパソコンを*くれた/やったと言った。

b. 太郎は私にパソコンをもらったと言った。

上記の内田の研究では大江(1975)、久野(1978)、鎌田(2000)、藤田(2000)などとは異なる、メタ表象の観点からそれぞれの言語事実を説明したが、さらに統一的な説明を試み、より単純な規則に支配されている英語と差異を明らかにする。

(3)いままでそれぞれの言語の特性ということから別個に研究されてきた日本語と英語の引用・話法をメタ表象という概念を道具立てとして認知語用論的に考察する。

3. 研究の方法

おもに以下の4点の研究を段階的に進めた。

I 先行研究のレビューを行い、従来の研究では説明できない項目を洗い出す。
II 理論的枠組みとして関連性理論(relevance theory)を採用し、日英語の比較研究の共通の物差しとなるよう理論的な調整、整備を行う。
III 新しい比較の基準となる認知語用論的概念を追究する。
IV 上記の基準により、具体的な言語事象を対象として日英語の比較対照研究を行う。具体的な分析対象として、念頭にある言語事象は以下のとおり。

(1) 過去6年にわたる基盤研究から判明した、願望表現「たい/たがっている」、授受表現「やる/くれる」が日英語で表現のされ方が大きく異なっている理由を関連性理論の知見を援用して解明する。

(2) 'What did he say?'に対する応答、'He loves you.'を自然な日本語に直すと、「君のことを愛しているって」のように、「って」が必要であるのに、英語ではそれにあたるものはない。また、'The thing is, is he getting to help me?'は「問題は、彼が我々を援助してくれようとしているのかだ」となり、「だ」がない直訳では日本語として座りが悪い。このような文末表現における日英語の違いを記述し、分析する。

(3) 引用表現が日英語でどのような違いがあるのか、検討する。たとえば、いわゆる自由間接話法は一般に英語では過去形、日本語では現在形で表現されるが、その言語現象の差をメタ表象の視点から解明する。

平成23年度は22年度までの科研の成果を背景に本研究に至る橋渡しをまず行う。上記のI段階とII段階を率先しておこなう。また、平成23年10月に日本語学文法学会で「日英語の比較研究をめぐって」と題してシンポジウムが計画されており、その企画者、責任者としてシンポジウムの司会、講師を務める予定になっている。そこでの構成、口頭発表をひとつの目標として研究を遂行していく。

前年度の研究計画を継続しつつ、段階IIIを経て、段階IVへ進み、さらに上記で述べた具体的な言語事実を分析し日英語の差異を考察し、その原理的な説明を試みる。その過程で、韓国の関連性理論家で、メタ表象について著書のあるE.-J. Noh教授に研究協力を求め、研究成果を同じ語順をもつ韓国語を比較、検討することによって、その妥当性と一般性を検証する。また、韓国語に精通しているアメリカの言語学者、W. O'Grady氏にも協力をお願いし、日本語、英語、韓国語の3語の比較にも触れる予定である。

4. 研究成果

平成23年度

それまでの科研等の研究成果を背景に本研究に至る橋渡しをおこなった。平成21年12月、23年3月にそれぞれ出版された、「関連性理論」(英語教育学大系第8巻『英語研究と英語教育』所収)、「引用とモダリティ:

メタ表象の視点から」(『モダリティ 対照研究』所収)を出発点としながら、英語語法文法学会でのシンポジウム「日英語の比較話法あるいは引用をめぐって」を企画し、司会および講師(発表タイトル「メタ表象からみた引用」)を務めた。

また、5月には単著『語用論の射程 語から談話、テキストへ』を刊行し、従来にない観点からの日英語の比較にかかわる考察をおこなった。12月にもメタ表象をキーワードとした研究を神戸市外国語大学英文学会で招待講演(「ダイクシスと関連性理論」)をしている。

3月にはメタ表象に関する著書のある韓国Inha大学の研究協力者Noh教授と面談し、日本語と同じ語順である韓国語との比較研究の妥当性と可能性について議論した。

平成24年度

引き続き英語と日本語の言語現象とメタ表象との関係を考察した。英語と日本語の引用とメタ表象との関係については8月に第3回引用・話法の会で発表した。また、論文「強い推意/弱い推意と「雨のなかの猫」」(3月刊行)ではテキストをメタ表象からみることによってHemingwayの短編「雨のなかの猫」の解釈に新しい視点を提供した。さらに、EXPLICIT COMMUNICATION: ROBYN CARSTON'S PRAGMATICSの書評では具体例としてシミリを新たな角度から論じた。

研究協力者O'Grady教授(ハワイ大学)の来日に合わせ、6月に研究打ち合わせを法政大学でおこなった。それに基づいて3月にハワイ大学を訪れ、同教授と日本語、英語、韓国語の比較研究の可能性について議論し、貴重な示唆を受けた。

平成25年度

メタ表象と日本語については、これまでの成果を、Dublin City UniversityのCentre for Translation and Textual Studiesにおいて'Higher-level Explicatures in Japanese and English'というタイトルで9月9日に招待講演をおこなった。その機会を利用して、Dublin City Universityの笹本涼子氏と今後の共同研究の可能性について議論した。また、『ことばを読む、心を読む 認知語用論入門』を開拓社から出版し、そこでは本研究の理論的背景となっている関連性理論の概要と、英語との差を交えた日本語のメタ表象の説明にそれぞれ1章を割り当てた。

日本語と韓国語のメタ表象との比較については、Inha大学のNoh教授を日本に招聘して、2月11日ワークショップを開催し、「Metarepresentational Phenomena in Japanese and Korean」のタイトルで共同口頭発表をおこなった。この内容をハワイ大学のO'Grady教授との面談で説明したところ、積極的な賛同とともに有益な助言も得られた。なお、ワークショップの発表論文は加筆修正して雑誌等に投稿する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

内田聖二 「強い推意/弱い推意と「雨のなかの猫」」『奈良大学紀要』第 41 号、1-11、奈良大学、2013 年(査読なし)

http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xoonips/listitem.php?index_id=3403

Seiji Uchida, 'Review: EXPLICIT COMMUNICATION: ROBYN CARSTON'S PRAGMATICS,' *English Linguistics*, Vol. 30, No. 1, 404-413, 2013(査読あり)

〔学会発表〕(計 5 件)

内田聖二 「メタ表象からみた引用」英語語法文法学会、2011 年 10 月 15 日(奈良女子大学)

内田聖二 「ダイクシスと関連性理論」神戸市外国語大学英文学会(招待講演)、2011 年 12 月 10 日(神戸市外国語大学)

内田聖二 「メタ表象と引用現象」引用・話法の会、2012 年 8 月 31 日、筑波大学

Seiji Uchida, 'Higher-level Explicatures in Japanese and English,' Centre for Translation and Textual Studies (Invited lecture), September 9, 2013, Dublin City University

Seiji Uchida and Eun-Ju Noh, 'Metarepresentational Phenomena in Japanese and Korean,' Workshop, February 11, 2014, Nara University

〔図書〕(計 3 件)

内田聖二 『語用論の射程 語から談話・テキストへ』研究社、2011 年(x+256 ページ)

内田聖二 『ことばを読む、心を読む 認知語用論入門』開拓社、2013 年 10 月(xi+196 ページ)

内田聖二 『ことばの仕組みから学ぶ 和文英訳のコツ』(畠山雄一編 第 4 章語用論(pp. 97-127)担当)開拓社、2014 年 6 月(xiv+178 ページ)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内田 聖二 (UCHIDA, Seiji)

奈良大学・教養部・教授

研究者番号：00108416

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

Eun-Ju, Noh

Inha 大学・教授

William, O'Grady

ハワイ大学・教授